

2) 佐渡の竹細工と中川眞晴さんについて

佐渡には竹が多く、小木を中心に赤泊に延びる海岸地帯を主として島内各地で竹細工が製作されていた(尾留川, 1964)。運賃が比較的少なくすむ竹細工は北海道への移出などには適した製品であったと言えるであろう。

小木では最盛期の大正15年には箆を中心に112人も竹細工職人がいたが(小木町史編纂委員会, 1977)、羽茂で専業としていたのは大石の中川辰平さんのみであり、家庭用の箆、籠、農業用の田植籠、漁業用の釣籠、海老籠、はえ縄箆、魚を入れる樽籠、味噌屋で使う米上げ箆、豆上げ箆、豚の輸送に使う豚籠など、注文に応じていろいろなものを作っていたとのことである。(羽茂町史編さん委員会編, 1998)。

そしてその息子が、中川眞晴さんである。中川さんは子供の頃から親の仕事を見よう見まねで覚えたが、先代からの技術をそのまま今日まで受け継いできた訳ではない。途中で樺太へ出稼ぎに行き、中国大陸での軍隊生活を経て、佐渡へ戻った。その後職人としての生活が始まり、自身で試行錯誤を積み重ね、竹細工から籐細工へ転向した経緯を持つ。それ以後も竹細工は昭和50年頃より作品として作り続けており、コンクールに出品するなどしている。詳細は次章の語りで紹介する。

3. 中川眞晴さんへの聞き書き⁴⁾

家業の竹細工：別に仕事つってもな。軍隊から帰ってきてから、何もすることないもんだから、結局親の。ま、親がだいたい竹細工やとったもんだから。それを見よう見まねでやった、ということだ。生活のため。

それ以前は、あの、小学校五年生んときから、五年生六年から今のサハリン⁵⁾へ行ってます。四年終って、要するに四月頃ですか。やっぱりあのう、うちが貧乏だったもんだから、それで結局口減らしていうかな。それがために樺太へ。兵隊に行くまでそこにおったの、呉服屋に。だから結局は兵隊から帰ってきて、呉服屋系統をやりやよかったんだけど、呉服屋ちゅうことになるとやっぱり相当資本が要りますもんで、それでまあ一番手取り早いところがこれだ。で、この仕事を始めた。

そういうことで別に、うーん、師匠についたとか人から教わるとか、そういうことは全然なかつ

た。自分で結局あの、小さい頃からやっぱり親の仕事を見ておったのが、やっぱり、初めてでもさ、その当時を思い出しながらやっぱりやって、どうにかこうにかできたもんだ。

一応そういうこと(父親が師匠)になるかね、うん。それだけのことなんです。だからまあ、あなたがたそういうふうにして(調査に)来られても、別にこれといって何もお話しすることはないような気がするんですが、ただ聞かれたことに対しては、自分の歩いてきた道だから、それだけのことはお答えできる。

親父の親もやっぱりやとったらしいんですよ。私で三代目になるかね。うん、(祖父の)代から。竹細工っていうものは、ここらやっぱし田舎で、まあ百姓、農家がほとんどだったわけですよ。それがために、その農家とか漁業とかそういう人たちの道具ていうかな、やっぱりあのいろいろ農家でも使うその、年間に相当の数の竹製品がやっぱり必要とされた。漁業もそうだし。そういうようなことで、結構やっぱり商売になったんです。ええ。それで、まあ先祖もやとったんだろうと思うんです。

あれ(味噌樽を絞める杵)はまた違うんですよ。竹細工とはいえ、あれは輪竹と言いまして、結局輪っぱを作る竹だから輪竹。あれは相当量の竹も必要で最盛期には佐渡だけの竹ではなんていうかな、使う量が足りなかったんです。それであの、そっちの半島の能登半島ですか、あそこからやっぱり輸入、輸入っていうかな仕入れた。あれはものすごい、ま、やっぱり味噌の、結局樽で当時は出荷した関係で相当出て、業者もそうねえ、羽茂だけでも七、八軒あったんですね。うん。これは相当量ですわ、やっぱり。ま、結局金額的にも大したものですよ、はい。

その輪竹、桶のタガにする竹とはまた別に、こちらは言うっていいかな、草を刈って入れる籠とか、それから田植えの時に使う苗籠とか、それから苗を運ぶ大きな籠とか、そういうものとか。それから後は、秋になって稲刈りが終わって初を選別する初通しなんていう、そういうものとか、あるいはまた大小いろいろの箆、ま、これは家庭用品になるけども。あるいはまた、もの…魚なんかを干すメカゴとかね。それから今度は海の方へ行ってはやっぱり釣り籠だとか、それから漁師が使うエビを生かす籠だとか、そう言ったようなもの

が相当な種類としてはあったでしょ。だからそういうものを作っておれば、結構やっぱり生活もできておったようです。

私らの場合はそれが、あの兼業でなくて。まあ生業ちゅうか、それが生活のあれ（手段）であつたわけですね。主力だつたわけですよ。

樺太：兄弟は私の場合、そうですね、ええと、五人。おれは二番目。

そうそう（兄弟のうち一人だけ樺太へ）。で、一年半位…二年位してからかな。私のすぐ下の弟も、まあ向こうが人手が要るといふことで、それでちょうど私も行つた関係で、どうだおまえ来てみんなかといふことで弟もやっぱり。ええ。行つて一緒にやっておりました。

向こうはよかつたですよ。樺太はよかつたですよ。ええ、そりゃもう。

どういふところ（がよかつたか）って、結局あの、ここにおると…。こんな話してもあんたがたわかるかしら、食べ物も満足に食えんような状態だつたもんだから。向こうへ行つたら食べ物はいいし、おらもう殿様みたい。やっぱり修行期間、修行中はつらいこともあつたけど、それはまあ仕方がないとして。そういうつらさは行つてる者はまあほとんど。その時はちょっとやっぱり泣けたりしたこともあつたけど、それよりも三度三度の食べ物です。

しかも私行つたところは、ものすごいその何と申すか、そこのおかみさんがおおらかな人で、やっぱり他の店なんかでは食べ物も相当ケチケチしておつたらしいんだけど、ものすごいその、何と申すかな、おおらかで。どう言つたらええか…、うん、「根性良し」ちゅうんだかな、気前のいい人で。食べ物なんかも本当に腹いっぱい。だからそれが一番よかつたんじゃないですか。うん。

（仕事は）呉服屋。呉服屋で、結局使用人が店の方だけで使用人が七、八人はおつたかな、私のいたころは。あとお勝手の方でジュウバ二人ぐらい。

うん、まあ、丁稚奉公して。ええと、七年八年かな。もうあそこから、やたらに帰つてこれないもの。十三からですか。二十一まで。

（帰つてくるきっかけは）兵隊。それからずつと兵隊に行つて、それで結局昭和二十…二十二年かな。昭和二十二年に帰つてきた。（兵隊では）

北支の方へ。北京、だいたい北京から保定⁶の周辺、そんなとこ。兵隊で五年位。（佐渡へ帰るまで通算）やっぱり十何年ね。

竹細工を始める：（二十六歳頃に佐渡へ戻り）それから竹細工を始めて。そうして、どうだろう、三、四年はやっぱりいろいろこつちで売れるものを作つたんかな。三、四年ぐらい、たぶんそうだと思うんですよ、はっきりとした記憶はないんだけど。それから、あれどうかなあ、四、五年。三年？ 四、五年してからかな、帰つてきてから。四、五年してから、どういふそのなんていふかな、都会の方へ行くと売れるものがあるらしい、といふことで。それでうーん、といふかその新潟の辺まで行つて見たんですわ。見たら…、ああそうか、それ前に竹籠、竹の買い物籠といふのがあつて、それを作つてみようと思つてね。

先代の竹細工とはまた全然違つて言つてええかな。うん。結局その竹の籠を作つてみようかと思つたのは、そこらにあるような買い物籠みたいなもんですわ。それでまあ、ものすごい数が売れると、いふことでやつてみたんです。ところがやっぱりそのやつていくうちにいろいろ、その竹をここをする面に（などと）生かすことがいっぱいあつて。

で、それはあちこち、ま、いろいろそういうことを考える前に、早、隣りの小木町あたりにやっぱり相当やつとる人がおつたわけですね。で、そういうとこへ行つてやっぱり技術を盗んだりなんかして。行つて教えてくれ言つてもなかなか教えてくれん。だからやっぱり、竹の染色にせ何にせ、やっぱり行つて見ながらやっぱり技術を盗んで来るより他に道はなかつたわけですね。

若さの至りといふのかな。ま、流れてる染め物の汁が流れとると、それを見たり。それから、薬屋へ行つて聞いたり。ま、薬屋、薬局ちゅうかな、そういうとこに昔はまあその染料を売つたわけですよ。それこそ量り売りでいくらでも売つてくれた。ほれで、あそこではどういふものを、とにかく竹を染めとる家の名前を言つて、あそこではどんなものを買つていふとか何とか、そんなこと聞いて。まあそういうようなことでどうにかこうにか、それこそ始めてから二、三年してから、やれるようになったのかな、うん。

そうそう（しばらくは試行錯誤で）、そらそう。

それとほら染めない、染めないで竹を青のまま、青というかまあそのまま使うか、あるいはまたそれを油抜きして、そうして白にして使うか。で、その初めのうちはやっぱり白で使ったんだけど、やっぱり白だけではダメだということで、やっぱり染色せんならんということでそれを染めて使うようになったわけだな。染料があるんですわ。塩基性の染料が。塩基性の染料で、ま、いろいろな色をやっぱり、二つぐらい混ぜたりなんかして、染めとるんだ。

やっぱりあのう、まあ、なんというかな、着物でも何でもそうでしょう、藍染めの着物だけではやっぱりダメで、柄物が必要になってくるのと同じ。染めていろいろ交互に編んでいくと、ま、いい柄も出来てくる。そういうことはやっぱりその呉服屋におった関係上、女の人の気持ちも多少はわかるし、ま、有利な点もあったわけですわね、うん。

(染めた方が) 割り方よかったですね。染めとか柄。それからやっぱりあの、まあ、籠持つ者はだいたい女の人だもんだから、女の人の気持ちなんかをつかむのには、非常に呉服屋におったときのことがよかったです。

それから、もちろん外交にも出んならん。それからしばらくしたけどもやっぱり外交にも出んならん。そうすると外交に出ても、人様と相對して話しんときなんか、やっぱりこっちは呉服屋のときとにかく人間対人間の取引きだったもんだから、愛想ちゅうか愛嬌ちゅうか話術ちゅうか、そういうようなもんが一番大切なもんだから。やっぱり外交に出てもそれが役立ったっていうことですね。それでどうにかこうにか、まあ、やってきたようなわけですわ。うん。

それ(職人氣質で愛想がないということ)は全然なかったです。それがないだけにやっぱり困ることもあったし、ええこともあったような気がしますね。職人氣質なんちゅう気持ちは私にはさらさらないです。だから、どこの人が教わりにきて、いくらも教えて。そら、もちろん自分の手間はつぶれるけども。それでも、自分の会得したわかるだけのことは、教えてやって。今でもそうです、ええ。

籐細工への転向から現在：竹の籠作とったけども、それがやっぱりまあ、だんだんだんだん、こ

の昭和の中頃か、になると交通の便も良うなり。(それ)から、人もものすごい仰山、東京あたりへ行ってみるとデパートあたりにも相当な人がおるし。それから、街歩くにも、ま、今でもひどいけども、その頃もやっぱりものすごい人だったんだ。

ところが竹で作った籠は、その人ごみの中を持って歩くとペッシャンコになる。ペッシャンコになると竹は折れる。そういうようなことで、もう竹の籠はダメだちゅうことに。うん。ていうことはまあここに佐渡のこの田舎におって、おれはやっぱりそれをつくづく感じて、こりゃ何とかせんならんぞと思うた。

そこで、今言う越後ちゅうかその新潟の近辺のどこへ行ったら、籠が。これ(藤)で作った、今の藤で作った籠が出とったわけです。ところがこれの作り方がやっぱり難しいんだけど。その以前兵隊から帰ってきてまもなく、つり籠とか何とかそういうものを作とった関係で。作り方がだいたいつり籠と同じだったもん。「よしこれならいけるぞ、そんならこれやってやろう」ちゅうことで。まず佐渡では私が最初でしょう、藤を入れたのは。

さ、ところが、材料探しにまた困る。それでいろいろ人に聞いたり、本見たりなんかして、結局この材料は大阪にあるちゅうことがわかって。あとからわかることや、東京にもありや名古屋にもあちこちにあるんだけど。ま、大阪にあるちゅうのを聞いたもんだから、それで大阪へ飛んで行って。

それより前に名古屋の問屋へ行って、ほれで、「実は竹の籠はこういうふうなあれでつぶれると売れんと、それではまずいのでおれは藤の籠を始めたいのだ」ということで行ったら、「うん、それはいい」と。いいから「いくらでもおみやあ(おまえ)のところで作ったら作っただけのものは、おれのところで買うからやってみい」ちゅうことで。それから大阪へ行って材料を仕入れてきて、ま、始めたのがこの製品の始まりです。ええ。

そら、編んでいくうちには(竹細工とは)微妙に違うところもあるさ。あるけどもやっぱり「ヘビの道はジャの道」「ジャの道はヘビ」だかしらんけども、なんともないわさ。

今ですか? そうですね、今は、今はそれでも二十種類ぐらい作とるかな。

この不景気出くわしたら、まずだめだな。こういう籠でもどうだ、去年も駄目だった。おとしぐらいまでは、そうねえ、どうだろう、一月に二百ぐらいは作った。それやっぱり脱衣籠は旅館、ホテル、それからゴルフ場、そういうところにまあ、ものすごい量が出たんですわ。

県内なんてもんじゃ（ない）、日本全国。それも、それで結局我々みたいなこういう小さいところは駄目だろう。やっぱり、今このカタログのYラタン⁷ちゅうもんが、これが言うてみりゃ、世界的なラタンメーカー。で、ここ見つけて、それでここへお願いして、ここへ納めることになるとる訳なんですわ。

今はこんなもんでも、向こうから、中国とか何とかあっちから来るものだと、このぐらいのでも、そうだなあ、三千、二千元か三千元で買えるはずなんです。ところがここで売るのは一つ一万、一万ぐらいする。それでもやっぱり売れる。だからやっぱりあの、何ていうかな、やっぱり高級品志向っていうかな。やっぱり安いものは駄目だっていうことだ。

Yラタンは取引きお願いしてからどうだろう、ええと十二、三年になるかな。平成に入る前かな。ここ（Yラタン）へ入るちょうど頃かな、だんだんやっぱりあっちの方から安いのが入ってくるもんだから、ああいうところ（以前納めていた名古屋の間屋）ではやっぱり売れんようになった。それで、ここ（Yラタン）へ「こうこうこうで一つこういう品物を作ってみたい」ちゅうたら、やっぱり何ちゅうかな、製品がおれんとこのがよかったんだろうと思うんだ、いっぺんでOKしてくれて。うん、それから、今度は向こうの言うとおりのものを作っております。

「遊び」の竹細工：藤を始めてから竹細工は…。でもやっぱりそれでも、竹やってみたいなあちゅう気持ちは捨て切れないもんだから、ま、あの今度竹細工が遊びになったなんていうかな、このとにかくこれだけの竹やぶがあるし、遊びの方にちょっと、ふらふら一っと。

こういうふうな遊びをやるようになって。それでどうでしょう、二十年、二十年ぐらいやっとなかなあ。

やっぱりこれ作っても売れないしさ。売れないし、売らないし。まあ、やっぱり、いまおったあ

の孫だとか倅に一応やっぱり聞いてみて、「残しておきてゃあ（おきたい）」ちゅうもんだから。売らないつうこともないんだけど、やっぱり売ってしまうともう作れない。

まあ、賞も。賞って言ってもそうだなあ、日展に出したいと思って、日展にそれでも二回、三回ぐらい出したんだけど。ちょこっとところで…。あと現代工芸は出し取るんだ。だから中央展で、要するに上野で入ったのは一つしかなかったかな、一回しかなかった、現代工芸で。うん。それとまあ、県は、県の方はずっと。こういうこと始めると今度はやっぱり毎年その時期になると、ムラムラーッとして。

今はこの目を悪うしたら、全然こんなことできんようになってき。目でも悪うなけりゃ、まだ腰が悪いだけなもんで、どうちゅうことはにゃあ（ない）んだけど。はや今こうやって見ても、そのところがどんな風になってるかわからん。

うん（今も毎日仕事をしている）。毎日、ま、結局もう何も望みもなけりゃ何もにゃあ（ない）もんだから、仕事しとるのが一番やっぱり身体のためにもええんだらうし。

4. おわりに

以上中川さんの語りを紹介してきた。もっとも印象的だったのは、樺太での生活についての話である。前章では質問を省略したが、筆者は樺太ではさぞ厳しい生活だったのだらうと思ひ、また厳しかったという返事を予想しながら、「向こうではどんな感じの生活だったんですか」と尋ねた。予想に反して、「向こうはよかったですよ。樺太はよかったですよ。ええ、そりゃもう。」との答えであった。

彼自身が説明しているように、当時の羽茂が「食べ物も満身に食えんような状態だった」ということが何より大きな理由であろう。それに加えて中川さんの前向きな性質によるところもあったのではないかと感じた。

佐渡に戻ってきてからの中川さんは、試行錯誤しながら竹細工に励んだが、それについても呉服屋時代の経験が生かせたと、プラス志向で振り返っている。そして籐細工への転向は、生活様式の変化を感じ取って選択したものだ。自身で売り込みに行ったところにも、商売の経験が生かされている。